

中国語の発音学習における苦手意識からみた
男女別学生の成績差

劉 国彬

中国語の発音学習における苦手意識からみた 男女別学生の成績差

劉 国彬*

On the Affection of Attitude Towards Phonetics Learning in Chinese
Studying via Analyzing the Test Results of Male and Female Students

Guobin LIU*

ABSTRACT

Generally speaking, female students learn foreign languages more quickly than male students. In Japan, most students studying Chinese have problems learning Chinese phonetics because there are some phonetic phenomena which do not occur in Japanese. These two variables were brought together in an analysis of the problems encountered in learning Chinese phonetics by male and female students. Additionally, the author investigated if there is a correlation between student attitude towards phonetics learning and their test results. The conclusion was reached that more female than male students have trouble in learning phonetics; however, they tend to pay more attention to phonetics, work harder and gain better test results.

キーワード：中国語，発音，苦手意識

1. はじめに

一般的に、外国語を学習する際に、発音の学習や習得は男子より女子のほうが上手に行うことができると言われる。また中国語を学習する場合に、母国語の発音に影響され、当該母国語にない発音に対して苦手と感じる学生は少なくない。本稿では、日本人中国語学習者の中国語の発音学習について、とりわけ日本語にない発音を中心に、その受け止め方を男女別に見て、学習者自身の苦手意識が、成績つまり発音習得にどのように影響を及ぼすか、その一端を解明したい。

初修外国語としての中国語に関する先行研究は数多く存在している。①まず挙げられるのは、中国語教育学会の会誌『中国語教育』の創刊号（2003年3月）から第15号（2017年3月）までの各号の論文、および、日本中国語学会の論文である。日本中国語学会の論文はJ-STAGEの『中国語学』（巻号1955年～2008年）およびその前身誌である『中国語学研究会報』（巻号1951年～1954年）『中国語学研究会（関西）月報』1950年（No.1～No.10）がある。これらの研究は、教授法や語学研究がほとんどを占めている。②次に各大学が刊行している研究論集も含め¹、同じように教授法と言語の研究が多数を占めている。③その中に、中国語に限ることなく、「気づき」を起こさせることが第二言語習得において重要であるという研究が存在している。認知心理学から影響を受けた第二言語習得理論において重要な課題の一つは「意識」である。ハワイ大学のSchmidt教授によれば、学習者は第

* 大学教育センター准教授

二言語を学習する際に、意識的に注意を向けて気づきの中でインプットの取り入れを行う。インプットをインテイクに変えるにも「気づき」は必要条件である。教授はこのような気づきを通して、アウトプットが可能になるというプロセスを提示している。また、「気づき」の必要性はすべての段階、すなわち、語彙、統語、対話など様々当てはまる。現在、「気づき」は英語以外にも、多くの第二言語教育において実践されている²。これらの先行研究に示された知見を踏まえ、本稿では、「気づき」の中で重要とされる「気づき意識」を取り上げ、中国語の発音（ピンイン）段階での習得について、男子学生と女子学生の発音に対する苦手意識と習得の差の原因究明を試みたいと考える。

2. 研究の着想

中国語 I クラスは、4 月時点で、再履修者を除く、中国語の学習歴はほとんど皆無であるため、授業の進行は、4 月初めから 6 月の初め頃までほぼ 2 か月にわたり、発音の基礎であるピンイン学習をする。6 月初めに 1 回発音（ピンイン）テストを実施した後、文法学習を始める。なお、教科書は、2016 年度は、郭春貴・郭久美子著、白帝社出版の『やさしく楽しい 400 語で学ぶ中国語入門』、2017 年度は、筆者編著、金星堂出版の『中国語の世界』を使用した。

6 月初めに行った発音（ピンイン）テスト結果では、女子学生の平均成績（2016 年度 79 点、2017 年度 79.8 点）は男子学生の平均成績（2016 年度 68.7 点、2017 年度 64.8 点）を、2 年連続で 10 点以上も上回っていることが分かる（図 1 を参照）。

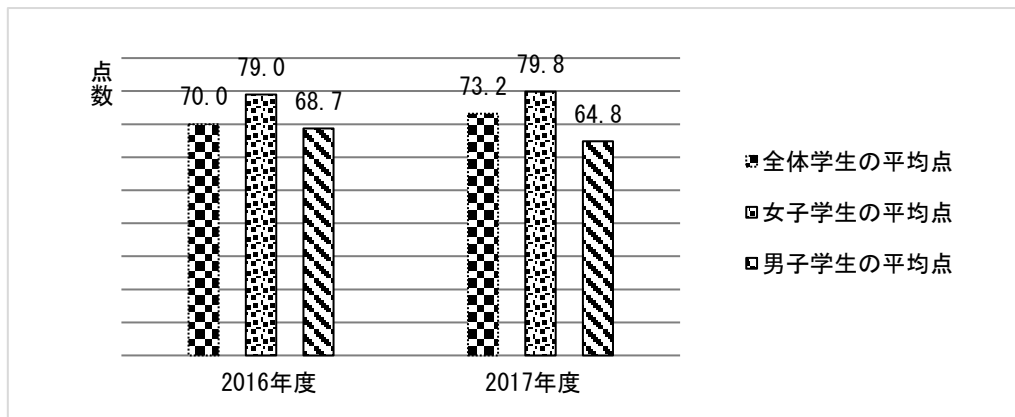


図1 2016年度と2017年度男子学生と女子学生の発音（ピンイン）テスト成績

では、男子学生と女子学生は同じ授業を受けていながら、テストの成績の差が生ずる原因はどこにあるであろうか。筆者は男子学生と女子学生が学習の過程において持つ苦手意識が成績に影響を及ぼしたのではないかと仮説を立てた。

苦手意識を解明するために、筆者は毎回授業終了直前に書かせたリフレクション・ペーパーのコメント³に注目した。コメント分析は決まった問題に解答することではなく、自由にコメントを書く形式であるため、学生の考えと学習実態をよりよく把握できるのではないかと考えている。

3. 研究の対象と方法

(1) 研究の対象

本稿の研究対象は、2016 年度と 2017 年度の福山大学の中国語 I 履修者を対象とする。2016 年度 477 名、2017 年度 439 名⁴であった。そのうち、筆者は、2016 年度と 2017 年度に、中国語 I の科目についてはそれぞれ 5 クラスを持った。再履修者を含め、2016 年度と 2017 年度の学生は、それぞれ 292 名と 236 名であり、そのうち、男女別に見ると、2016 年度は男子 250 人、女子 42 人、2017 年

度は男子 186 人、女子 50 人であった。

(2) 研究の方法

研究の方法は次の通りである。毎回の授業終了直前に、3 分間の時間を与えて、学生全員に受けた授業のコメントを書かせた。コメントの内容は自由だが、主に「難しかったところ」と「感想」は必須項目として指示した。16 回のうち、初回（授業ガイダンス）と最終回（テスト）を除き、前期 14 回、計 14 回のコメントを集めた。本稿は発音を中心にみるため、14 回のうち第 2 回からと第 6 回までの発音学習段階のコメントを分析範囲とする。なぜなら、前期の授業 15 回のうち、1 回目は履修に関する授業ガイダンスで、コメントがなく、また第 7 回目から第 15 回目は文法や会話の内容であり、ピンイン学習は第 2 回目から第 6 回目であったからである。これらのコメントを分類し、さらに男女別に分けて整理した。

4. コメント分析

筆者は、2016 年度と 2017 年度では、授業の 2 回目から 6 回目まで中国語の発音（ピンイン）を教えた。具体的には 2 回目に声調（四声と轻声）と単母音、3 回目に複母音と鼻母音、4 回目に鼻母音、5 回目に子音、6 回目にピンインに関する注意点の説明を行った。そして 7 回目はピンインテストという展開であった。

コメント分析の結果を、上記の声調、轻声、単母音、複母音、鼻母音、子音の 6 項目に沿って見てみよう。

(1) 声調の苦手意識の比較

周知の通り、中国語の発音は声調（四声）が違うことによって意味が違って来る。日本語に四声がないため、四声の区別を学生に理解させ、さらに習得するまでは、長時間にわたる繰り返し練習が必要であり、それを身につけることは、中国語のステップアップの重要なカギとなる。

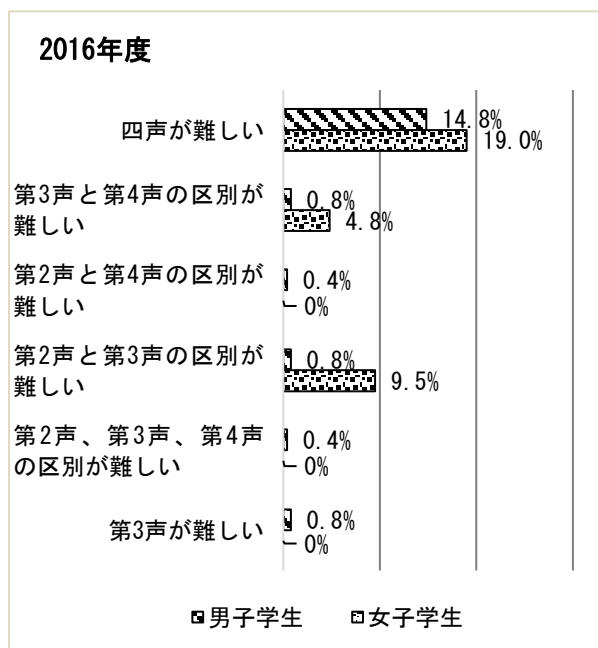


図 2-1 四声に関する男子(250 人)と女子(42 人)の比較 (2016 年度)

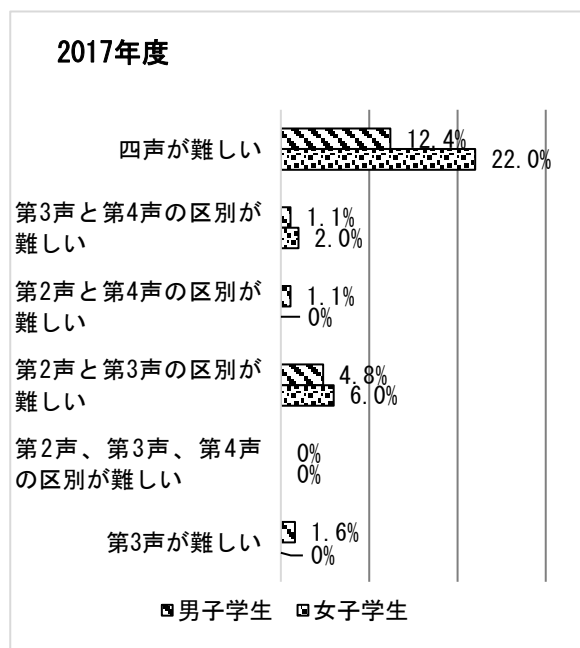


図 2-2 四声に関する男子(186 人)と女子(50 人)の比較 (2017 年度)

声調に関して、学生が書いたコメントを5項目でまとめた。図2-1と図2-2に示した2ヵ年の結果には、ほぼ同じ傾向が見られる。女子のほぼ20%は「四声が難しい」と感じていると解されるが、男子は10%強に留まった。詳しく見ると、「第3声と第4声の区別が難しい」、「第2声と第3声の区別が難しい」の割合は、2年連続女子が男子より高い。もともと第2声は急激に上がる声調、第3声は低く抑える声調、第4声は急激に下がる声調という特徴があるため、日本語を母語として話す学習者は難しく感じる傾向がある。授業中で教師は大量に練習させる必要がある。この発音については、授業中に繰り返し強調した。女子は男子に比べ声調の重要性をより強く受け止め、そのために難しいという意識が生じたのではないかと考えられる。

(2) 軽声の苦手意識の比較

軽声は元々音声弱化したもので、前の音節に続けて軽く添えるようにして発音する。したがって、「前の音節」、すなわち「四声」が定着しなければ、軽声も定着できない。図3-1は、男子学生は漠然と「軽声が難しい」とだけコメントしたのに対して、女子では「第3声と軽声が難しい」、「第1声と軽声、第2声と軽声が難しい」と同じ割合のコメントが書かれている。このように細かな問題点を見つけたことによって、勉強する際に重点が分かって、テストを受ける際に、正解を答えたのではないかと思われる。ただし、2017年度の学生は軽声に関するコメントは殆んどなかった。今後、さらにデータを集め、実証する必要があると考える。

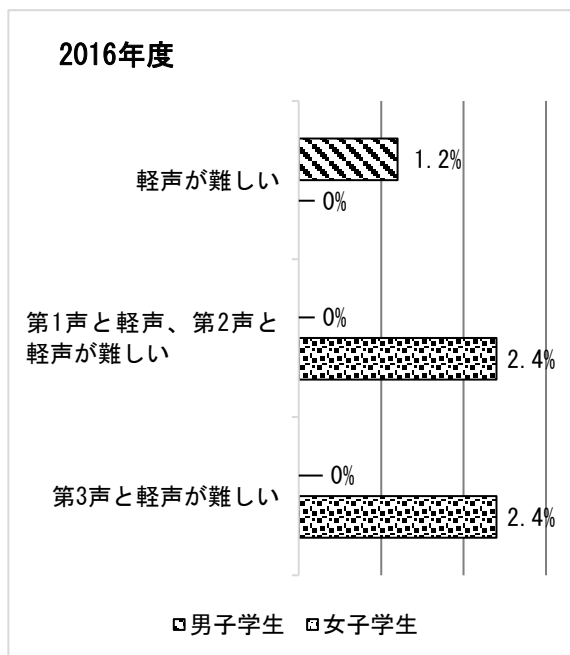


図3-1 軽声に関する男子(250人)と女子(42人)の比較 (2016年度)

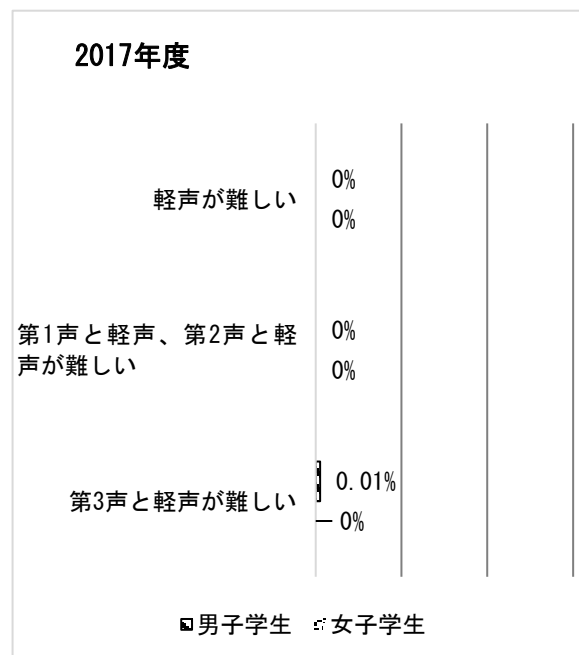


図3-2 軽声に関する男子(186人)と女子(50人)の比較 (2017年度)

(3) 単母音の苦手意識の比較

中国語の単母音は7個あり、日本語より多い。特に日本語にない発音の「e」と「ü」について、日本語を母国語とする学習者にとっては難しい。図4-1と図4-2はいずれも、「e」と「ü」について男子より女子のほうが難しいと感じていることが分かる。「u」という発音は、唇をすぼめて前に出す発音の仕方があるので、日本語の「う」とは、同様に違っている。これも男子より女子のほうが難しいと感じた者が多かった。加えて、2017年度的女子学生は「単母音が難しい」と感じたのは10%もあった。このように、女子学生は授業中にポイントを押さえた発音をより意識的に行っていたといえる。

はないかと考える。

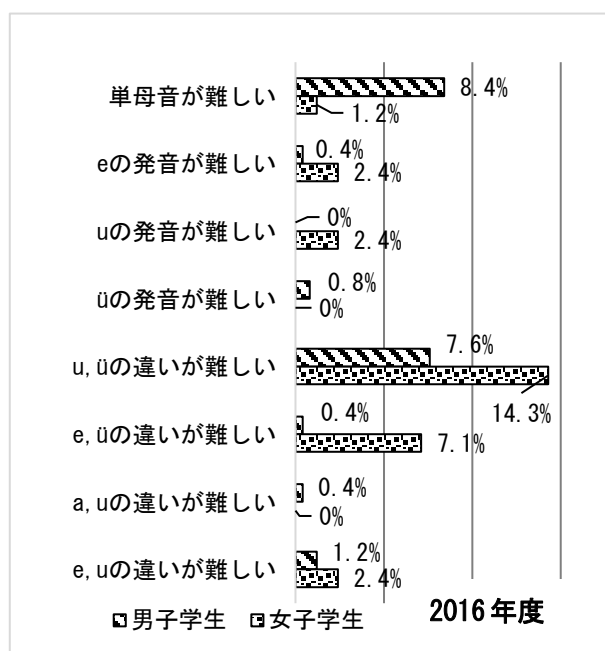


図 4-1 単母音に関する男子(250人)と女子(42人)の比較 (2016年度)

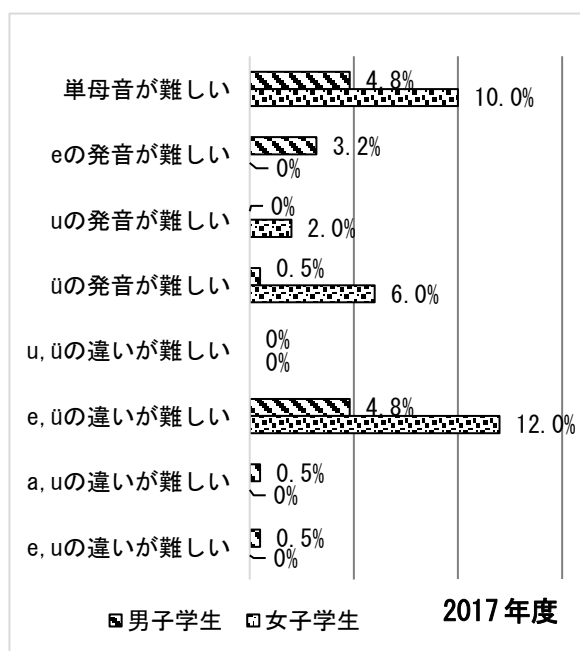


図 4-2 単母音に関する男子(186人)と女子(50人)の比較 (2017年度)

(4) 複母音の苦手意識の比較

複母音は16個あり、日本語の発音に近いので、学生は習得しやすい母音である。「複母音は簡単だ」の割合は、2016年度と2017年度の学生について男女の割合は同じであった。ただし、複母音の最後の「üe」は、「i」の発音をしながら「u」の口の形、つまり唇を前に突き出しながら「i」を発音するため、日本語の発音にはないため、図5-1において「üeの発音がよく分からない」と感じたのは、2016年度の学生については男子より女子のほうが多かったが、2017年度は女子より男子のほうが多かった。「複母音が難しい」とコメントしたのは2017年度では女子が多かった。これに関して、さらにデータを集める必要があると思われる。

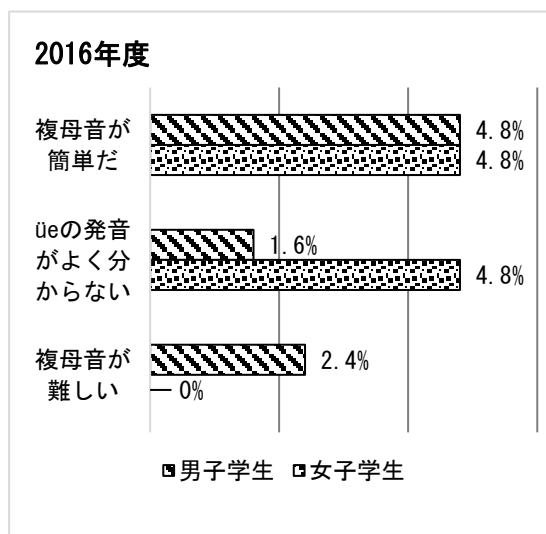


図 5-1 複母音に関する男子(250人)と女子(42人)の比較 (2016年度)

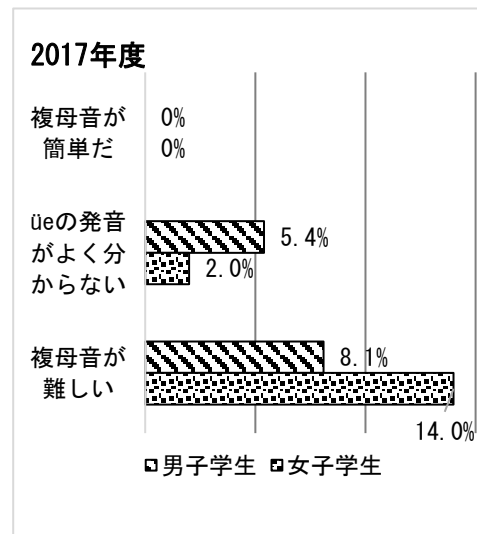


図 5-2 複母音に関する男子(186人)と女子(50人)の比較 (2017年度)

(5) 鼻母音の苦手意識の比較

鼻母音は16個あり、「-n, -ng」の区別で発音の違いが生じる。図6-1と図6-2において、「鼻母音が難しい」と感じたのは、2016年度女子学生は35.7%と2017年度の30%であったが、男子学生は8.8%と17.7%で、女子学生より割合が低かった。次に、女子学生は「enとengの違いが難しい」、「uangとuengの違いが難しい」、「ianとiangの違いが難しい」、「engとongの違いが難しい」、「ingの発音が難しい」と細かく気づいたコメントを書いていた。

このように、女子学生は難しいと感じたことに対して、男子学生はそれほど感じていなかった。全体的に男子学生より女子学生のほうが細かい点に気づき、苦手意識が生じたのではないかと考えられる。

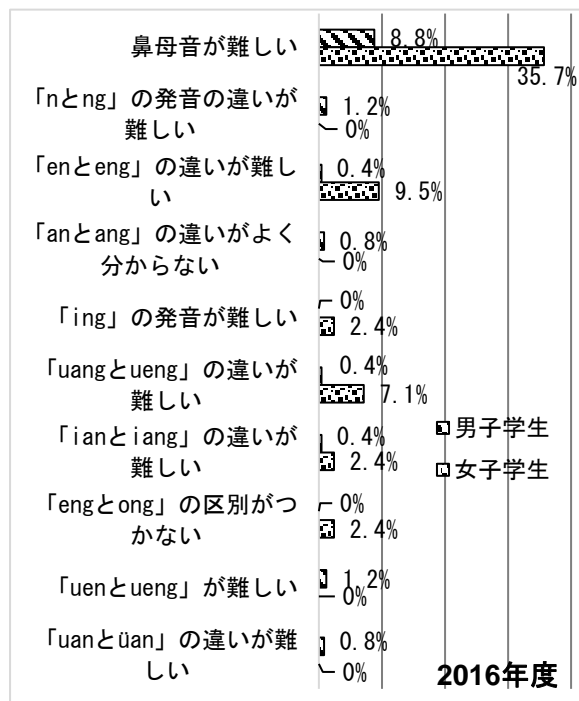


図6-1 鼻母音に関する男子(250人)と女子(42人)の比較 (2016年度)

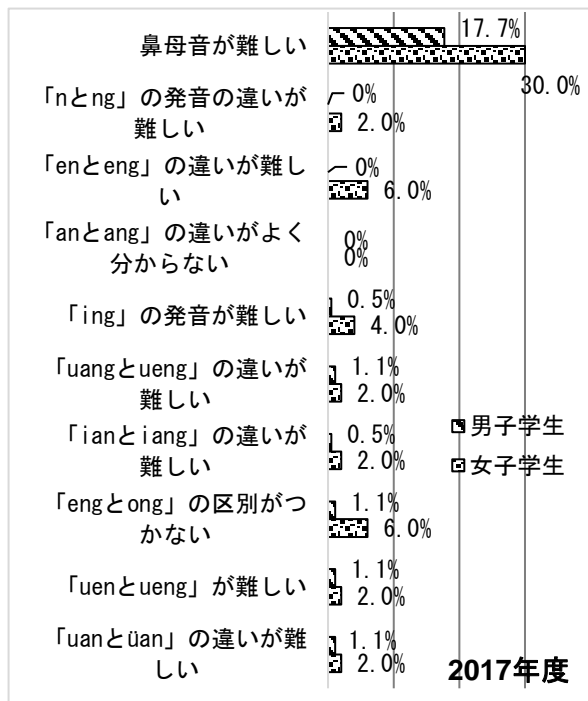


図6-2 鼻母音に関する男子(186人)と女子(50人)の比較 (2017年度)

(6) 子音の苦手意識の比較

子音は中国語の中で21個あり、無気音と有気音に二分される。加えて、日本語にない巻き舌音ないし「そり舌音」が存在しているため、例年発音の学習において、重点として扱った。

2016年度と2017年度の学生のコメントを見ると、2年とも、「そり舌音が難しい」と思われた。2年とも女子学生の3割ほどがそのように感じていたからである。反面、男子学生は5.6%と8.1%で、1割にも達していなかった。次に、「無気音と有気音が難しい」についても、そう感じた女子学生が男子学生より多い。「子音が難しい」と思う学生は2年連続女子のほうが男子より多かった。このように、男子学生の楽観的な態度とは大きく異なって、女子学生は重く受け止めたように思われる。

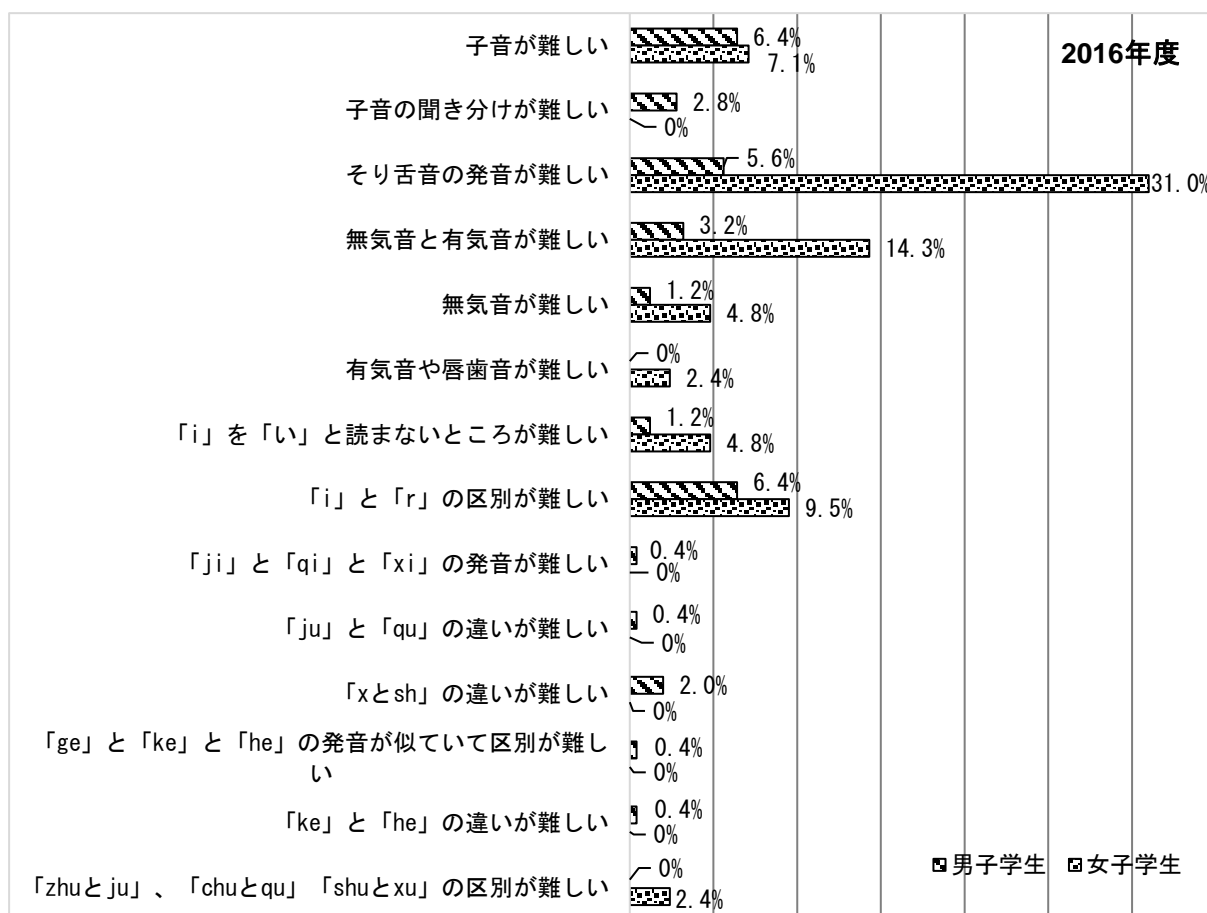


図 7-1 子音に関する男子(250人)と女子(42人)の比較 (2016年度)

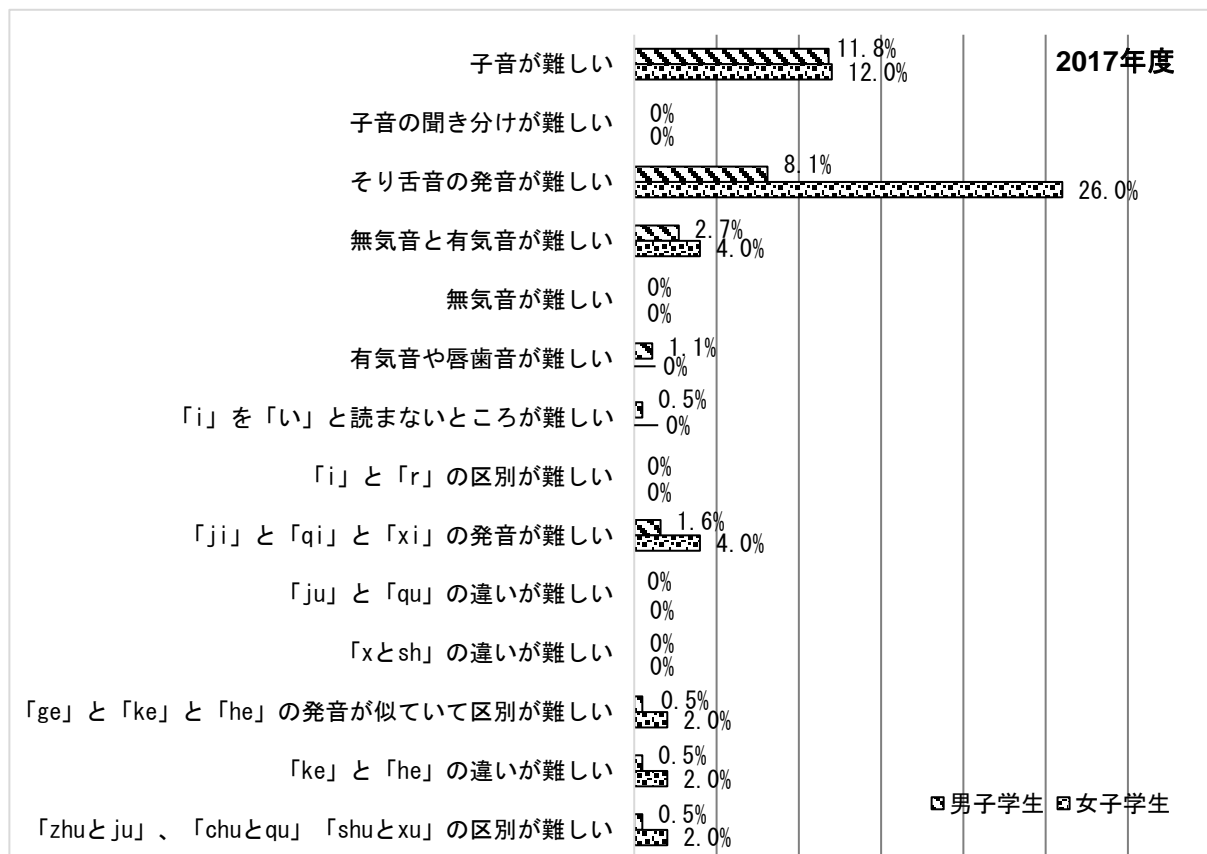


図 7-2 子音に関する男子(186人)と女子(50人)の比較 (2017年度)

5. 結論

以上、筆者は中国語の発音（ピンイン）を教える段階で、声調、軽声、単母音、複母音、鼻母音、子音のそれぞれを男子学生と女子学生のコメントを比較しながら分析した。軽声と複母音を見ると、2016年度と2017年度のコメントは違った傾向がみられた他、声調、単母音、鼻母音、子音を項目は2年連続女子学生のほうが男子学生より苦手意識が強いことが明らかになった。2016年度と2017年度は教科書が違っても、学習者対象が違っても、女子学生が男子学生より成績が良いことが分かった。このことは、本研究に信憑性のあることを裏書きする。

結論は、苦手意識が強ければ強いほど発音の難しさを感じ、勉強を重視し、テスト成績が良くなるということである。基礎が皆無の状態からスタートの初修外国語を学習する場合、できるだけ早いうちに学生に「苦手意識」を「気づき」させ、それを発音の上達につなげていくことが重要である。

また、本稿は、女子学生と男子学生を比較して見たことにより、次の知見を得た。すなわち、女子学生は男子学生より問題を細かく捉えていることと、そして男子学生は漠然としたコメントが多かったことが分かった。今後の授業において、教師として、男子学生と女子学生の特性を念頭に置いて、男子学生に細かい点を注意させるべきではないかと考える。また、グループ学習の際、女子を一人でも参加させれば、学習効果が期待でき、男子学生の成績アップにつながると考えられる。

【資料】ピンインテスト問題⁵

(一) 自分の名前を簡体字とピンインで書きなさい。

簡体字 _____ ピンイン _____

(二) 次のピンインに四声をつけなさい。

(1) yi yi yi yi (2) lao lao lao lao

(三) 次のピンインに声調を書き、中国語を書きなさい。

(1) mama (母) _____ (2) yeye (祖父) _____

(四) 次のピンインを簡体字と日本語を書きなさい。

(1) Zǎo shang hǎo! 簡体字: _____ 日本語: _____



(五) 次の中国語を日本語とピンインを書きなさい。

(1) 大家好! 日本語: _____ ピンイン: _____

(六) 発音を聞いて、正しいと思われるほうに○をつけなさい。

(1) zhī-jī (2) shì-xì

(七) 発音を聞いて、声調を正しい位置につけなさい。

(1) niú  (2) Zhong guo 

【注】

¹ 例えば、①張立波(2012)「東北大学の初修外国語の中国語学習に関する基礎調査について」では、大学の中国語履修現状、動機、などが述べられている。②中国語における発音指導の方法については、侯振鋒「日本人の中国語発音の暗転とその指導法」において舌歯音そり舌音、u, üなどを日本人にとって難しい発音の指導の立場で論述している。③中国語の音声学の指導については、王振宇など（ポリグロニア第21巻 2011年10月）において中国語の音声学の角度から分析したなど、多くの研究が蓄積されている。

² 「気づき」に関する実践研究論文は、例えば、赤木浩文(2017)「スペイン語話者の日本語の発音学習および指導」『外国語教育研究』第20号、外国語教育学会、132-150や井狩幸男(2005)「意識・注意の視点から見た言語習得」『人文研究』56号、大阪市立大学大学院文学研究科紀要、127-140など、多数ある。

- 3 毎回の授業に対して学生にコメントを書かせる方法は、大学教育センターの中尾佳行先生の授業参観を通して学んだ方法である。ここで感謝の意を表したい。
- 4 福山大学教務課係長真壁史江様と大学教育センター助手の日暮美紀先生から提供されたデータに基づく。ご協力に感謝の意を表したい。
- 5 筆者の2016年度と2017年度のピンインテストであり、大項目は同じであったが、細かいところは多少修正した。例えば、2016年度、項目（七）には挿絵がなかったが、2017年度のテストでは加えた。なお、ここに提示したのは、試験問題の大項目のみで、すべての問題は省略している。